Card Magic Magazine

No. 4 August 5, 2012 by Hideo Kato

© Hideo Kato 2012 年 8 月 5 日

Thirty Card Mystries

= 第 3 回 =

第２章　即席的なトリック

この章に解説されたトリックは、あまり技法をマスターしていないビギナーでもできるものばかりですが、それらは上級者にとっても学ぶ価値のあるものでもあります。最初に紹介するトリックは、ジェームス・モレンが得意としているもので、モレン氏の好意によって収録させていただきました。

8. ウィズザマインドアイ

= With the Mind Eye =

＊現　象＊

マジシャンは目隠しした状態で、客に１枚のカードを選んでもらいます。そのカードがデックの上に返され、デックは何回かカットされます。目隠しによって何も見えないことを強調し、選ばれたカードを強く念じてもらうことによって、そのカードを見つけることができると言って、カードをゆっくりディールしていきます。

「念じ方が弱いですね」とか、「わざと違うカードを念じているのでは」とか、つぶやきながらディールを続け、あるところでストップします。そして１枚のカードの名前を宣言し、ストップしたところのカードを表向きにします。それは選ばれたカードです。

＊方　法＊

原理としては何も新しいものではありませんが、このプレゼンテーションはたいへん効果的です。デックを人から借りて、密かに１枚のカードをパームします。デックをテーブルに置きます。それから目隠しをしてもらいます。パームしている手は腕組みをすることによって、誰にも見えないようにします。腕組みをする途中で、目隠しの鼻のすき間からパームしているカードをグリンプスします。

デックを客にシャフルさせてから、１枚のカードを抜いてもらい、残りのデックを受け取ります。客の抜いたカードを観客に見せてもらってから、デックのトップに替えさせます。それからパームしているカードを密かにトップに加えます。

つぎに ' 心の目 ' について適当な話をしてから、デックを何回かカットしますが、最初は中央あた

りからカットすると､選ばれたカードは中央あたりに移ります。つぎは中央より少し下でカットします。最後は中央より少し上でカットします。その結果、選ばれたカードは中央あたりに運ばれます。

目隠しによって何も見えないことを強調してから、トップより表向きにディールしていきますが、「見えなくてもわかるんです」などと言いながらやります。ディールするとき密かに枚数を数えます。グリンプスしたカードが見えたら、その枚数目とつぎに置かれる選ばれたカードを記憶します。

そのようにしてすべてのカードをディールしたら､「1 回目はよくわかりませんでした。もういちどやります」と言って、こんどは裏向きにディールしていきます。選ばれたカードを手に持ったところでストップして、そこで選ばれたカードの名前を告げ、当たっていることを確認します。それから持っているカードを表向きにします。

心の目

= 加藤英夫、2009 年 10 月 8 日 =

オスカー･ウェイグルの大傑作’ブラインドホールド’では、パンチカード (釘などの先でカードのコーナーに出っ張りをつけたカード) をキーカードとして用いていましたが、前述のジョーダン作品のように、目隠ししてキーカードをのぞき見て当てる、というやり方を読んだ記憶はありません。けっこう新鮮な感じがしました。

しかしながら、他のトリックでもジョーダンは 1 組のカードを全部ディールする、ということを平気でやりますが、それを 1 回半も繰り返すというのは、とても忍耐力がいります。演じる方もそうであるなら、観客はなおさらです。そこで、鼻のわきから見るというアイデアとキーカードの組合せを最大限生かしながら、もっと時間のかからないやり方を考えてみました。

＊現　象＊

このやり方では、途中までマジシャンの前に表向きにディールしていき、途中でストップして、そこまでディールしたカードをテーブルの前の方にずらして広げて、その中に選ばれたカードがないことを見せたあと、テーブルの中央にある表向きのカードの上に、そのあとのカードをディールしていきます。あるところでストップして、選ばれたカードをたずねてから、つぎのカードを表向きにします。選ばれたカードです。

＊方　法＊

目隠しをしたあと、デックを相手に取らせ、よくシャフルさせてから、受け取ります。「これからあなたにやってもらうことを説明します。このように 1 枚ずつカードを置いて言ってください」と、カードをディールしながら言います。4 枚置いたところで手を止めて、「そして好きなところでストップしてください」と言います。「もっと置いてからでもかまいません」と言って、あと

3 枚ディールします。「どこでストップしてもかまいませんが、時間がかかりすぎるいけないので、全体の半分より手前でストップしてください」と言います。

「ストップしたら、このように最後に置いたカードをのぞいておぼえてください」と言って、7 枚目に置いたカードを立てて持ちます。鼻のわきからそれをグリンプスします。「おぼえたらもとに戻して」と言って、テーブルのカードの上に裏向きに戻し、「そして残りのカードを上に重ねてください」と言って、左手のカードをテーブルのカードの上に重ねます。そしてデックを取り上げ、「ではこのままカードを持ってください」と言って、デックを相手に渡します。

相手が指示したことを終わったら、デックをよくそろえてから渡してもらいます。「私は心の目であなたのカードを見つけます」と言って、あなたの前に表向きに 1 枚ずつディールしていきます。鼻のわきから見える位置に置くのです。

キーカードが置かれたら、「ここまでに選ばれたカードはありません」と言って、ディールしたカードを 30cm ぐらい前にずらし、その位置でスプレッドして、「あるかどうか見てください」とたずねます。相手は「ありません」と言います。広げたカードをそろえます。

いま表向きのカードがある位置で、表向きのディールを続けます。そして 6 枚ディールしたところでストップして、つぎのカードを右手に裏向きのまま取り、「このカードで強く感じました」と言います。

左手のカードを表向きに返して、表向きにディールされたカードの上に置き、それらを左の方にずらしてから、左手で目隠しを外します。それから選ばれたカードを名乗らせ、そして右手のカードの表を見せます。けして目隠ししたまま選ばれたカードを現してはいけません。

9. シンプリシティスペラー

= The Simplicity Speller =

これは、ふつうのカードを使ってマジックを演じているとき、いつでも演技の間に加えて演じられるものです。

＊現　象＊

客がデックをシャフルしたあと、裏向きに 2 組にディールします。どちらかのパケットをマジシャンの左手に渡します。客は他方のパケットから任意のカードを選び、見ておぼえてからマジシャンの持っているパケットのトップにのせます。そして残りのカードをその上に重ねます。マジシャンはデックを裏向きにテーブルに置き、6 つのパケット分けてから、それらを違う順で重ねます。それから客の選んだカードのスペルに合わせてカードをディールします。そのあと手に残っているカードのトップカードを表向きにすると、それはまさに選ばれたカードなのです。

＊方　法＊

トリックはシンプルです。客にデックを 26 枚ずつに分けさせます。一方のパケットを受け取ったあと、客が他方のパケットからカードを選んでいるとき、デックの上下エンドを強く押して、中央が上がるように反らせます。中央に曲がりグセがつきます。

そのように曲げられたパケットの上に選ばれたカードを返させ、その上に残りのカードを重ねさせます。デックをテーブルに置き、6 つのパケットに分けますが、最初はトップから 7, 8 枚取り、それをデックの右隣りに置きます。また 7, 8 枚取り、さらに右隣りに置きます。3 組目を取るときは、曲がったパケットより上のカードをすべて取り、右方に運ぶときに手前エンドを上げることによって、フェースカードをグリンプスしておぼえます。あと 2 組カットして、右へ右へと置いていきます。

つぎに 6 つのパケットを重ねますが、ボトムに選んだカードのある 3 回目にカットしたパケットを取り、いちばん右のパケットに重ねます。それらを取り上げ、最初にボトム部分であったパケットに重ねます。それらを 4 回目カットされたパケットの上に重ね、それと同時に反対の手は 2 回目にカットしたパケットをつかみ、最初にトップであったパケットの上に重ねます。そしていま重ねた 2 組分のパケットを、先に重ねた 4 組分のパケットの上に重ねます。以上で、選ばれたカードはもとの枚数目 (トップから 26 枚目) に戻ります。

ここでグリンプスしたカードのスペル数を思い起こします。たとえばダイヤの６は、″S-I-X-O-F-D-I-A-M-O-N-D-S″と、13 文字になります。52 枚のカードはスペル数が 10 文字から 15 文字のどれかですから、文字数によって、カードの名前の前につぎのような文章のスペルを言いながらディールします。

10 文字　YOU PICKED OUT THE
11 文字　YOU SELECTED THE
12 文字　YOU TOOK OUT THE
13 文字　YOU PICKED THE
14 文字　YOU CHOSE THE
15 文字　YOU DREW THE

以上のスペルに合わせてディールすると、25 枚のカードがディールされます。ディールしたあと、手元のトップカードを表向きにします。選ばれたカードです。

英語のレッスン

= 改案 : 加藤英夫 =

この ’ シンプリシティスペラー ’ を、日本人の観客に見せる場合のアレンジの一例を説明します。それまでしてスペルトリックをやりたくないという方はパスしてください。「英語には不思議な力があるんです。今日は英語のパワーを使ってマジックをやってみましょう」というような演

出もあるのです。

＊方　法＊

相手にカードを取らせるとき、サイレントカウントなどでトップから25枚をカウントし、25枚目の下にブレークを作ってカードを閉じます。相手のカードを返してもらうときに、ブレークからカードを分け、下半分の上にのせさせ、いったん右手のカードをその上にのせたときに、右手のカードのボトムに相手のカードをスチールし、「このカードを忘れないで」と左手のカードのトップを指指したとき、右手のボトムカードをグリンプスします。（ドントフォーゲットグリンプス）。

「今日はマジックをお見せしながら英語の勉強をしたいと思います。あなたのカードを当てるのに英語のスペルを使います」と言って、紙に文章を書きますが、グリンプスした相手のカードのスペル数によって、前述のトリックと同じように文章を書き分けます。書いた文章を見せて、「あとはここにあなたのカードの名前を記入するだけです」と言います。

「あなたのカードは何でしたか」と相手のカードをたずね、文章の″THE″のあとにカードの名前を書き入れます。「これで’あなたは○○の×　×を取りました’という意味になります」と言いますが、○○の××の部分は、書いた英語を日本語にした名前にさしかえて言います。

「それではこの英語のスペルに合わせてカードを1枚ずつ置いていきましょう」と言って、スペルに合わせてディールすると、手元のトップから相手のカードが現れます。

10. トリオ

= The Trio =

このトリックに使われている原理を使った別のトリックを、マンスリーサービスで提供したことがありますが、たいへん好評であったため、同じ原理にもとづくこのトリックを当書に含めることにいたしました。(訳注：これは当書よりも以前に、ジョーダンが執筆活動をしていた証拠です)。

＊現　象＊

封が開けられていないデックを取り出し、紙と鉛筆と封筒を借り、封がされているままのデックをじっと見つめてから、紙に何かを書き、封筒の中に入れ、1人の客に持たせます。客がデックの封を開けて、デックの中からジョーカーを取り除きます。デックをよくシャフルしたあと、いくつかの裏向きの列にディールします。そして任意のカードを3枚抜いて、表を見ずにわきに置きます。

マジシャンはカードを集めて左手に持ち、抜き出された3枚をトップにのせて、そしてデックをテーブルに置きます。封筒の中から紙を出して、そこに書かれているカードを読み上げて、デックのトッ

プの 3 枚を表向きにすると、それらは読み上げられたカードと一致しています。

＊秘　密＊

優れたトリックの大半がそうであるように、これもまたシンプルなトリックです。しかしながら、マジシャンのテクニックが優れていれば、その効果はより発揮されます。

このトリックがうまくいく 2 つの条件は、客がオーバーハンドシャフルでシャフルすることと、使うデックがバイシクルの青裏のライダーバックであることです。このデックがマジシャンの都合がよいようにパックされていることは、私以外に誰も知らなかったと思います。

裏面のデザインが、上半分と下半分で微妙に違っているのです。ですから、カードが逆向きにされると、他のカードと識別することができるのです。しかもまったく見事なことに、出来上がったデックがパックされるとき、つねに特定の 3 枚が逆向きになっているのです。その 3 枚はハートの2、ダイヤの 10、クラブの 10 です。

＊方　法＊

紙に書くのは、最初から逆向きになっている 3 枚のカードです。そしてオーバーハンドシャフルさせてもそれらは逆向きになったままです。したがって、カードが裏向きにディールされるときに、その 3 枚がどこに置かれるかがわかります。デザインの中でもっとも違っているのは、左上と右下にいる天使の右肘の下の小さな渦巻きの中にあります。一方の渦巻きでは、端が丸点で終わっていますが、他方は丸くはなっていません。

客が 3 枚を抜き出したあと、カードを集めるときに、見つけた方向違いの 3 枚をトップに集めます。そのあと密かにデックの上半分をひっくり返しながらボトムにまわします。

客が抜き出した 3 枚がデックのトップに置かれたあと、密かにデックをひっくり返します。このあと、トップの 3 枚と紙に書かれたカードを照合して、一致しているのを示します。

客がしかるべき 3 枚のうちのカードを抜いてしまう可能性がありますが、それは効果を高めるチャンスです。他の 2 枚をトップにのせたあと、密かにデックをひっくり返したあとに、そのカードをトップに置くのです。

＊備　考＊

この原理の使い方は、まだ色々と考えられると思います。このトリックにおいても、カードのすり替え方は、他のテクニックに置き換えられるはずです。

11. オッドオアイーヴン

= Odd or Even =

＊現　象＊

マジシャンはデックを借りて、52 枚そろっているかどうか調べ、ジョーカーを取り除きます。デックを客にシャフルさせたあと、デックを持った左手を客の方にさし出し、好きなだけカットして取らせます。カットしたカードの枚数が、奇数であるか偶数であるか、客に当てることができると宣言します。マジシャンが「ワンツースリー」と言ったら､すぐ客は「奇数」とか「偶数」と言います。カードを数えると、客の言ったことが当たっています。何回か繰り返しますが、つねに当たります。

＊方　法＊

デックを借りたら､枚数を確認したあと､ジョーカーを取り除くと言って､ジョーカーの陰に 1 枚のカードを重ねて取り、ポケットにしまいます。残りのデックは 51 枚となりました。

客がデックをカットしたあと、あなたは自分が持っているパケットの手前エンドを右親指で 1 枚ずつリフルして、密かにそのパケットの枚数をカウントします。

「ワンツースリー」と言って、客に「奇数」とか「偶数」と言わせたら、密かにカウントした枚数と客の言った答えによって、つぎのどれかで対応します。

客が「奇数」と言って、マジシャンのパケットが偶数の場合、客のパケットを数えさせる。

客が「奇数」と言って、マジシャンのパケットが奇数の場合、マジシャンのカードを数えさせ、それを 52 から引き算させ、客のカードが奇数だと言う。

客が「偶数」と言ったら、あなたのが奇数か偶数かによって、同じように相手のを数えさせるか、マジシャンのを数えさせて 52 から引き算させるかします。

あと 1 回か 2 回繰り返せば十分でしょう。

今日の発見

= 第 3 回 =

No.007　ショートカードの性質

投稿日：2007 年 9 月 14 日

以前このスレッドで " ジニー "1938 年 1 月号に書かれている、Van Etten の 'Sensational Card Location' を紹介いたしました。選ばれたカードの上にショートカードを隣接させて、そのあといくらリフルシャフルしても 2 枚が離れないことを利用するものでした。それが発表された 9 ヶ月後の、同誌 1938 年 10 月号に、その原理を発展させた作品が掲載されたのを見つけました。Paul Morris による 'Aces and Kings' です。現象はつぎのようなものです。

デックをリボンスプレッドして、4 枚のKを表向きにスプレッドの中にばらばらに入れます。そしてデックを何回かリフルシャフルします。またデックをリボンスプレッドして、それぞれのKとその上にある裏向きのカードをペアで抜き出します。裏向きのカードを表向きにすると、それらは 4 枚のQです。このトリックの秘密は、Qがショートカードであるということです。

"Card Magic Library" 第 10 巻の ' 王様登場 ' は、サイドショートの 4 枚のKをチャーリエパスで現すというものです。上記のアイデアを取り入れると、つぎのような現象のマジックを演ずることができます。

フラリッシュペアーズ

= 加藤英夫、2012 年 2 月 25 日 =

デックを表向きで何回かリフルシャフルします。それから裏向きに持ち、チャーリエカットしてから、親指をトップカード、他の指をボトムカードに当てて、勢いよくデックを右手の方に投げます。すると左手に 2 枚のカードが残ります。それらを裏向きのままテーブルに置きます。そのようにしてあと 2 組目と 3 組目のペアを現し、4 組目のペアを現したら、そのペアを表向きに返して、それらが同じマークのKとQであることを見せます。他のペアも表向きにすると、すべて同じマークのKとQのペアです。

No.008　原理の発見者は誰か？

投稿日：2007 年 9 月 21 日

‘ペイオフ’は、ウォルター・ギブソンの傑作として、雑誌”フェニックス第 1 号”（1942 年）に発表されました。ところが今日、ギブソンよりも 3 年まえに、同じ原理で類似の現象の作品を見つけました。雑誌”ジニー”1939 年 11 月号に書かれている、オスカー・ウェイグルの’The Little Star Prediction’です。若干ハンドリングは違いますが、原理と現象はほとんど同じです。

補　足

よくシャフルされたデックをだいたい半分に分けて、ある手法によって一方のパケットの枚数を密かに認知します。一方が他方より X 枚多いとします。そうすると多い方のパケットに入っている赤いカードの枚数は、少ない方のパケットに入っている黒いカードの枚数よりも、(X/2) 枚だけ多いのです。色を逆にしても同じです。多いパケットに入っている黒いカードの枚数は、少ない方のパケットに入っている赤いカードの枚数より、(X/2) 枚だけ多いのです。これが’ペイオフ’の原理です。

’リトルスタープリディクション’では、シャフルされたデックを正確に半分に分けます。通常なら、一方のパケットの中の赤いカードと、他方のパケットの中の黒いカードの枚数は同じです。そこであらかじめ黒いカードを 4 枚密かに抜いてポケットに隠しておきます。

その状態でよくシャフルしたあと、デックを半分に分けると、一方のパケットに入っている赤いカードの枚数は、他方のパケットに入っている黒いカードより 2 枚多いのです。ですから、’ペイオフ’と同じような当て方をします。’ペイオフ’は ″Card Magic Library 第 5 巻 ″ に解説されています。

第 2 段では、ポケットから密かに 4 枚の黒いカードを取ってきてデックに加えます。そうすると赤と黒は同数になりますから、予言として、「あなたのカードの中の赤いカードと私のカードの中の黒いカードが同数である」と書けばよいのです。

ギブソンの’ペイオフ’のように、だいたい半分に分けさせるやり方だと、密かに一方のパケットの枚数を認知する作業が必要です。ウェイグルの正確に半分に分けるやり方では、シャフルされたデックをディールして 2 組に分ければいいのですから、手間が省けると思います。

No.009　あるマトリックストリック

投稿日：2007 年 9 月 21 日

今日は、雑誌”ジニー”1940 年 7 月号の中に、オーヴィル・メイヤーが書いている’ユニメンタリティ’を見つけました。つぎのような現象です。

5 人の客にカードを 5 枚ずつ渡します。それぞれの客は 5 枚の内の 1 枚を記憶します。すべてのカードが集められ、客がよくシャフルします。マジシャンは 10 枚のカードを広げて客に見せ、その中に誰かのカードがあるかどうかをたずねます。ある客があると言ったら、マジシャンはそのカードを当てます。そのようにしてすべての客のカードを当てます。

メイヤーはサイ・ステビンススタックを使い、スタックの先頭から 5 枚ずつを 5 人の客に渡します。1 人目の客には AD、4C、7H、10S、KD を渡し、2 人目の客には 3C、6H、9S、QD、2C を渡し、以下同じようにスタックの続きのカードを 5 枚ずつ渡します。それぞれの客に渡した 5 枚のうちの先頭のカードだけを記憶しておきます。そうすれば、そのカードからあとの 4 枚を思い出せるからです。

シャフルされたデックから適当な 10 枚を見せて、ある客がその中にあると言ったら、10 の中にあるその客に渡したのと一致するカードがその客がおぼえたカードだとわかります。

しかしながら、10 枚の中にその客が受け取ったカードが 2 枚以上ある場合もあり得ます。その場合にはフィッシングの手口を使います。5 枚ずつカードを見せていけば、2 枚以上ある確率が低くなります。とは言っても、アウト対策は不可欠です。

カードをシャフルすることはできませんが、フィッシングの手口を使わずに行う、私のバリエーションはつぎのようなものです。

サイ・ステビンスの先頭から 5 枚目を 1 人目に見せてそのうちの 1 枚をおぼえさせたら、それを裏向きにテーブルに置きます。それからつぎの 5 枚を 2 人目の客に見せます。そのようにして 5 人の客におぼえさせ、つぎつぎと見せたカードを重ねていきます。

25 枚をフォールスシャフルしてから、5 つのパイルにディールします。ディールしたあとは、どのパイルもシャフルさせてもかまいません。

ひとつずつパイルをすべての客に見せていき、その中にある客のカードがあると言ったと

き、その 5 枚の表を見ることなく、その客のカードを当てることができます。たとえば見せているのが 3 番目のパイルであるとしたら、その客に見せた 5 枚のうちの 3 番目のカードがその客がおぼえたカードなのです。

カーティス・キャムさんの投稿（2007 年 9 月 21 日 ）

加藤さん、あなたはサイモン・アロンソンの’Histed Heisted’を知っていますか。そのトリックでは、5 枚ずつ 10 人までの客に渡して演じることができます。そしてカードは集められてから、よくシャフルさせることができます。マジシャンは端から 10 枚ずつカードを読み上げていき、ある客がその中にあると言ったら、その客のカードを当てることができるのです。フィッシングはいっさい必要ありません。かなり集中力がいりますが、たいへん不思議に見えるマジックです。

加藤英夫の投稿（2007 年 9 月 22 日 ）

キャムさん、情報を有り難うございます。アロンソンの’Histed Heisted’を知りませんでしたが、あなたの説明から推測することができました。

集中力がいるというのは、メモライズドオーダーを順に告げていくのがたいへんだということですか。1 人目の客にメモライズドスタックの 1 枚目、11 枚目、21 枚目、31 枚目、41 枚目を渡したのだとしたら、たんにスタックを順番に読み上げていくだけではないのですか。それほど集中力がいるとは思えませんが。

私が投稿したバリエーションでは、客にカードを見せて、相手のカードを見つめて念じさせ、それを当てるということが重要なのです。

加藤英夫の投稿（2007 年 9 月 23 日 ）

キャムさんがアロンソンの’Histed Heisted’のことを指摘してくれたので、アロンソンの著書を調べ、同作品が彼の”Bound to Please”に解説されているのを見つけました。そのやり方は私が推測した通りでした。

私は読んですぐ、アロンソンの通りに演じるとしても、何もメモライズドスタックなど使う必要がないことに思い当たりました。カードの順番をメモしたカードを 1 枚紛れ込ませておき、カードを送りながら、そこに書いてあるカードを読み上げていけばよいのです。メモライズドスタックを使えない私にとっては、これは貴重な発見でした。

ギルブレストリックを考え抜く

映像 0014 をごらんください。

<u>0014</u>

これだけしつこいプロセスの演技が、はたして一般の観客に対して演ずるマジックとして良いかどうかは、ここでは考察も指摘もいたしません。この演技者にしても、この通りに現実の演技でやるとは思えませんし、あくまでもマジシャンへのチャレンジとしてやっているのではないでしょうか。

いずれにしても、ギルブレスプリンシプルを知っている私が見ても、全体を見抜くまでに 3 回かかりました。全体を見抜いたとき、この演技の中に、ギルブレストリックに関する学ぶべき点がいくつかあることがわかり、今回ここで取り上げることにいたしました。

赤黒分離シャフルについて

まず初めに、シャフルのやり方について考察いたしましょう。最初のシャフルは、赤と黒の分離状態を保つシャフルです。つぎに赤黒を交互にするファローシャフルです。そして最後に、デックをいくつかに分けてリフルシャフルすることについてです。

最初のオーバーハンドシャフルでは、上半分が赤で下半分が黒だとしたら、中央で分けて下半分をシャフルしますが、最初に取るカードをインジョグします。そうすれば、つぎのシャフルでインジョグから分けて行えば、何回繰り返しても分離状態が保たれることになります。

こんな当たり前なことをわざわざ指摘したのには意味があります。それはこのような古くからあるやり方が、ハンターシャフルやアイアランドシャフルと呼ばれる方法よりも、よほど優れていると感じたからです。アイアランドシャフルというのは、ふつうにオーバーハンドシャフルしていき、中央近くになったら 1 枚ずつ取っていき、中央を過ぎたらまた普通にシャフルするやり方です。

アイアランドシャフルでは、どうしても 1 枚ずつ取るときの雰囲気が、前後のふつうの取り方とは違います。この演技者のやっている方が、よほど本物のオーバーハンドシャフルの感じが出ています。このようなことは、本で読んだだけではわかりません。アイアランドシャフル

やハンターシャフルの巧妙性を感じて、優れた方法だと判断していたとしたら、それは〝マジシャンの勘違い〟のひとつです。

失礼！ここで突然〝マジシャンの勘違い〟という言葉を使いました。じつは、私はこの呼称をタイトルとして、そのうち当誌に新しいシリーズを始めるつもりでいます。マジシャンというものは、やり方の巧妙性を気に入るあまり、一般の観客に対してどのような印象を与えるかを深く考えず、それが素晴らしいものだと思い込むクセがあります。そのようなことについて考察するシリーズです。

本題に戻ります。つぎはファローシャフルです。私は中央から正確に分けて行うファローシャフルは、演技の脈絡の中でそのやり方を行う正当性がないかぎり、極力使わないようにしています。話があちこち飛びますが、私がファローシャフルをなるべく使わないように決心したのは、アレックス・エルムズレイの演技をマジックランドのレクチャーで見たときです。

エルムズレイがファローシャフルしたとき、そこに〝意図のある怪しい気配〟を強く感じ、「そうかファローシャフルでは、手元を注視しなければならないことが、どうにもならない弱点なんだ」と確信し、ファローシャフルと決別する決意をしたのです。

すみません、寄り道ばかりして。また話を戻します。

映像 0014 の演技では、オーバーハンドシャフルしたあとに、「もっとよく混ざるやり方をしましょう」と言って、ファローシャフルやっています。このようなことが、脈絡の中で正当性があるということです。ただしそのようなセリフを言えばよいというわけではありません。よく混ぜるということを演技の最初に告げて、オーバーハンドシャフルしたあとにそのように言って行うから、正当性が感じられるのです。

ここで手に持ってリフルシャフルしたのを抜いてしまうフォールスシャフルが行われますが、これについては触れません。

さて、最後のリフルシャフルについてです。表向きでデックをまず左右 2 組に分け、それらを手前に運んで左右のカードを 3 組に分け、それぞれをリフルシャフルしています。セリフでは客にシャフルさせるとも言っています。

ここで「おやっ」と思ったのが、中央のパイルのフェースカードか、どちらも黒いカードだったことです。上に同色があるパイルをリフルシャフルすると、上から 2 枚ずつ取ったときに、赤黒のペアにならないことがあります。ですから、あのようなやり方をしたのではうまくいかないのでは、思ったのです。

よく考えてみたら、何組に分けてあのようなシャフルのやり方をしても、パイルをあのように集

めれば、2 枚ずつ取れば赤黒のペアになることがわかりました。あの映像の場合、いちばんマジシャン寄りに置いた左右のパイルの合計は奇数であり、どちらもいちばん下が赤いカードです。ですからその 2 つのパイルのシャフルのあと、必ずいちばん下は赤になります。その赤がつぎのパイルの黒とくっついて赤黒のペアとなるのです。

赤黒分離の見せ方について

最後の本当のリフルシャフルによって、上から 2 枚ずつ取ると、赤黒交互ではないが、必ず赤と黒がペアとなります。ノーマン・ギルブレスの原案 ' マグネチックカラー ' では、赤いカードと黒いカードは磁石のように引き合うと言って、デックを背後に運び、赤と黒をペアに出して見せていく、という見せ方となっています。

映像 0014 では、いったんデックを 2 組にディールして分け、2 組がトップから色違いになっていることを利用して、映像の通りに分けることによって、色違いを完全に分離させています。これはこれで面白いプレゼンテーションだと思います。

私が思いついたことは、自分のカードを表向きにして左右に置いていくのではなく、赤黒が判別できるマークドデックを使用して、裏向きで 2 組に分けるというやり方です。それから 4 つのパイルを見せた方が、赤と黒が分かれたインパクトが強いのではないかということです。

2 組に分けるのを省く

以上までを書き、**映像 0014** に関する考察をいったん終えましたが、あることが頭の中に引っかかっていました。シャフルされたデックをディールして 2 組に分け、さらに相手とマジシャンがカードを分けるという操作は、あまりにも冗長な感じがします。

その部分がどうにかならないだろうかという思いが、つぎのやり方を導いてくれました。

攪拌と分離

= 加藤英夫、2012 年 4 月 18 日 =

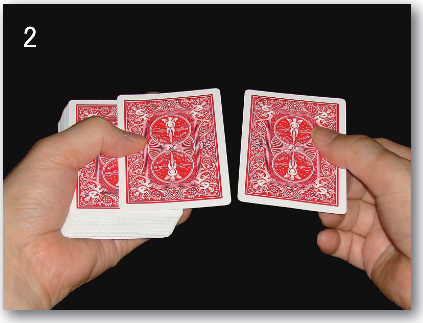
「化学の世界では、2 つの物質を攪拌することと、逆に分離させるという作業があります。それらをカードで表現してみたいと思います 」と言ってスタートします。

「攪拌のやり方をお見せします」と言って、カードを混ぜる操作を行います。リフルシャフルのあと、表向きにリボンスプレッドして、よく混ざったことを見せます。

「攪拌する部分はマジックではありません。これから分離するプロセスをマジックでやるのです」と言って、つぎの操作を行います。

トップの 2 枚を押し出しますが、少しずれた状態で右手でつかみます。図 1。

図 2 のように 2 枚を分けますが、裏のマークを見て赤の方を右手に取るようにします。上にあって下にあっても、つねに図 2 の形に分けるのです。そして 2 枚を左右に離してテーブルに置きます。



以下、同じようにして 2 枚ずつ取り、左右のパイルに分けて置いていきます。全部終わると、右の 26 枚はすべて赤、左の 26 枚はすべて黒となります。適切なセリフを言って、それぞれのパイルを表向きに広げて見せます。

＊備　考＊

マークを認知するのは、2 枚を押し出してから見るのではなく、押し出すまえに見ておいて、そのあとなるべく視線を動かさないで行うようにします。

押し出した 2 枚に右手をかけるときは、デックを少し持ち上げて、右手がつかんだあと、両手を少し下げながら左右に分けると、つねに分け方が同じように見えます。

また右手は 2 枚をつかむのではなく、上のカードを右に置くときは、右親指で滑らすようにして、下のカードは下から中指で滑らすようにすると、スムーズにできます。

この分離ハンドリングは、今回紹介した**映像 0014** の混ぜ方と組み合わせるのではなく、もう少し短縮化した混ぜ方と組み合わせた方がよいと思います。たとえば、オーバーハンドシャフルで赤黒分離シャフル 2, 3 回のあと、「もっとよく混ざるやり方と言って 1 回ファローシャフルして、ここで表向きにリボンスプレッドして見せて、だめ押しとして表向きでリフルシャフルする、というのでちょうどよいのではないかと思います。

最後になりましたが、赤黒分離を保つオーバーハンドシャフルをするのに、境目のカードをエンドショートにしておくと、中央で分けるのが楽です。手元を見ないでオーバーハンドシャフルできます。ファローシャフルのために中央から分けるもの楽になります。

カードマジック徹底研究

エイトカードブレーンウェーブ Part 3

ハンドリングのフィネス

今回は、’エイトカードブレーンウェーブ’系のトリックを演ずる場合のハンドリングについて考察することにいたします。

＊カードの選ばせ方＊

相手に１枚のカードを選ばせるトリックにおいて、どのように選ばせるかは、そのトリックによって向き不向きがあります。

’エイトカードブレーンウェーブ’では、カードをファンに広げて、１枚抜かせるというやり方は使えません。抜かれたところからカットする必要があるからです。両手の間に広げて抜かせれば、相手が抜いたところから分けて、右手のカードを左手のカードの下に入れてそろえれば、そのままオルラムサトルティに続けられる状態になります。

ファンに広げるのは使えないとしても、テーブルに広くスプレッドして選ばせることはできます。その場合は、「１枚抜いてください」と言ってはなりません。抜かれてしまうと、それより上のカードを下にまわすのができなくなります。

「好きなカードを指さしてください」と言います。相手が指さしたカードの左右を広げて、そのカードを前に抜き出して相手に取らせます。抜かれたところが空いていますから、カードをそろえるときに、右のカードを左のカードの下にすべり込ませてそろえればよいのです。

表向きにテーブルに広げて、カードの名前を言わせて選ばせる場合も、同じように指定されたカードの左右を広げて、指定されたカードを抜き出してから、同じ方法でそろえます。

ディールしてストップをかけさせるやり方をする場合は、最初にカードが何枚あるかを見せたり、言っておくべきです。上から下にまわしてストップをかけさせる場合も同様です。

トリックによっては、偶数枚目を選ばせなければならないことがあります。そのような場合は、「カードを選んでいただきますが、好きなところでストップをかけてください」と言ってはならないことです。そういうセリフを言ってやると、ストップをかけたときに置いたカードを、相手は選んだと思いますから、手元のトップカードを渡すのが変な感じがしてしまいます。

「カードを 1 枚ずつ置いていきますから、どこでも好きなところでストップをかけてください。すぐでも、あとの方でもかまいません」と言って、ディールしていきます。取らせたいカードを置いたときにストップがかかったら、「このカードが選ばれました」と言って、そのカードを前に置きます。

取らせたいカードが手元のトップにある場合は、身を乗り出すようにして、左手がディールしたカードの上空に位置するようにして、左手のいちばん上のカードを右手で指さして、「ではこのカードを使います 」と言って、そのカードを取って前に置きます。ディールしたカードの上に左手を位置させるのは、左手のカードの方にフォーカスを集めたいからです。

いずれの場合でも、手に残っているカードをディールされたカードの上に重ねれば、オルラムサトルティのできる状態になります。

なお、偶数枚目もしくは奇数枚目のカードを取らせる必要のある場合、テーブルにカードを並べ、相手に好きな数を言わせて、しかるべき端から数えて取らせるという方法もあります。これが適切な状況を思いつきませんが、使い道があるかもしれません。

＊カードの持ち方、取り方＊

雑誌 "New Tops" 1965 年 11 月号に初めて登場した、エドワード・マルローの 'オルラムサトルティ' の解説では、最初のパケットの持ち方はディーリングポジションで、右手でトップカードを取ったとき、左親指をパケットの左サイドに当てて、ちょうどチャーリエカットをするときのような位置に持ち上げて、それから両手を返して、左右の手のカードを同時に見せています。

それに対して、ロベルト・ジョッビの " カードカレッジ " 第 3 巻では、左手は親指を左サイドに添えてはいるものの、マルローほどパケットを持ち上げずに返しています。ただし、人さし指を浮かすことによって、カードの面がよく見えるようにしています。

マルローのようにパケットを浮かせて返すと、カードの面が完全に見えますが、もともとマルローは 4 枚のカードで行うことで解説していますから、浮かせることが問題ではありません。しかし 'エイトカードブレーンウェーブ' のように、連続的に多くの枚数で行う場合、いちいち浮かせてやっていたのではスムーズに行えません。ジョッビのようなやり方でよいと思います。

ただし、左手をジョッビのやり方でやると、ジョッビが説明している、右手のカードの取り方はノーグッドです。彼は右手は右下コーナーをつかんで取れと書いているのです。そうすると、右手のカードを返したときにはカードのほとんど全面が見えて、左手のカードは全面が見えないという、アンバランスな見せ方となります。

したがって、私は右手はコーナー近くではなく、カードの右サイドをつかむ感じで、両手を

返したときに、図 1 のような感じになるようなやり方をします。

＊カードの返し方、捨て方＊

ジョッビのやり方で決定的に賛成できないのは、左手のカードと右手のカードを交互に返し、捨てるのもほとんど同時にではなく、交互に捨てていることです。ちなみにマルローは 2 枚同時に捨てています。

ジョッビのやり方でとくに異常なのは、1 枚目を右手に取り、つぎに左手を返して左手のカードを見せ、それから左手のカードをもとの向きに戻し、同時に右手のカードを返して見せつつ、左手のいちばん上のカードを落としている点です。右手の動作で左手のフォールスムーブをカバーしているのですが、その動作自体が怪しく見えます。

かといって、ニック・トロストの ' エイトカードブレーンウェーブ ' の解説では、" つねに先に右手のカードを先に落とせ " と書いています。これを、右手のカードを落としてから左手のカードを落とせと解釈するのはまずいのです。そのようなやり方をすると、左手が反対面を見せてから戻して、上のカードを落とすという流れが見るものに明確にとらえることができるのです。

両手のカードを同時に返して反対面を見せ、それから両手を戻して同時にカードを落とすのですが、そのとき右手のカードの方が下になるようにして、ほとんど 2 枚が重なった状態にして同時に落とすのです。左手のカードを先に落とす必要がある場合は、そのとき左手のカードの方が下になるようにします。

なお、オルラムサトルティのあと、落としたカードをすぐ取り上げるような手順では、左手の方を先に落としても、最後の 1 枚で落としたカードをすくい上げれば、うまくつながります。

今日ははここまでとしておきましょう。

???????????????????????????????

それでいいのかな？

第 3 回　本当にそんなことをやるのか？

???????????????????????????????

英語に "Prolific" という単語があります。" 誰それはプロリフィックなクリエーターだ " などとよく表現されます。"prolific" とは " 多産な " という意味です。私もプロリフィックなクリエーターだとは思いますが、スチュワート・ジェイムスには絶対にかないません。発表した作品点数は、おそらくマルローもかなわないと思います。

しかしながらプロリフィックなクリエーターが残した作品群には、実用レベルまで磨かれていないものが多いという傾向があります。それはそうです。ひとつのアイデアを思いついたときに、じっくり時間をかけて磨き上げをしていては、プロリフィックたり得ないのです。

今回はそんなジェイムス作品の中で、絶対に解説されている通りにはやりたくない、でもこのアイデアは面白い、といった顕著な例を取り上げます。以下に雑誌 "Tops" 1941 年 4 月号に解説されている 'Echoing Vision' の現象説明を忠実に翻訳しておきす。

あなたが後を向いているとき、客の 1 人がデックをシャフルしてから、あまり多くない枚数のカードをテーブルにディールします。ディールしたのと同じ枚数をもう 1 組ディールしてから、残りのカードをわきに置きます。

客は 2 組のパケットを重ね、フェースカードを見て記憶してから、それらのカードを封筒の中に入れて封印します。それを後ろを向いたままのあなたの手に渡します。あなたは封筒をあなたの目の前、すなわち客から見えないところに運び、何かをやります。それからまた客に返します。封筒は開けられていません。

客は封筒を開けてカードを出し、テーブルに残っているカードの上に重ねます。それからトップから順にカードを読み上げていきます。あなたはまだ後向きになっています。そしてあるカードが読み上げられたとき、あなたはストップをかけます。そのカードが選ばれたカードです。

「何だこりゃ」と思いませんでしたか。思わなかったとしたら、あなたもジェイムスと同じぐらいマニアックです。封筒に入れて、それをまた出して残りのカードに重ねるというのですよ。そんなことをするぐらいなら、私はマジックをやりません。それほど気違いじみたマジックです。

しかしながらやり方を読むと、、、もっと馬鹿馬鹿しくてもっとあきれてしまいます。ポケットにマイクロメーターを隠しておき、封筒を受け取ったら、封筒の外から厚さを測るというのです。あらかじめ封筒の厚さとカード 1 枚の厚さを測っておき、それにもとづいて何枚入っているか

を認知するというのです。それ以上説明しなくてもおわかりですね。

馬鹿馬鹿しいと思っただけでは、クリエーター失格です。少なくとも、封筒の中に入れたカードの枚数を認知すること自体は面白いですから、それを生かす方法はないでしょうか。少なくとも、ジェイムスのように複雑な操作をやったのでは、アイデアの面白さは生かされないと思います。

いっそのこと、封筒の中に何枚入っているかをダイレクトに当てるのはどうでしょう。それはそれでトリックとしては成立するかもしれません。少なくとも、ジェイムスの原案よりはマシなような気がします。しかしながらマジックの演技としては、ただ枚数を当てるだけではドラマチックではありません。しかも 2 組にディールさせることに対しても理由づけがありません。そこでつぎのようなことを思いつきました。

重さでわかるカード当て

= 加藤英夫、2012 年 5 月 6 日 =

後向きになり、相手に左右 2 組にディールさせ、ある程度の枚数を置いたら好きなところでストップさせます。ただし、左右に同数枚置かせます。残りのカードはどこかに隠してもらいます。

2 つのパケットのうち一方を 1 人目に取らせ、よくシャフルしたあとトップカードを見ておぼえさせます。それからそのパケットをテーブルに置かせます。

2 人目に他方のパケットを取らせ、よくシャフルしたあとボトムカードを見ておぼえさせます。それからそのパケットをテーブルの上のパケットの上に重ねさせます。そしてそれらを封筒に入れて封印させます。

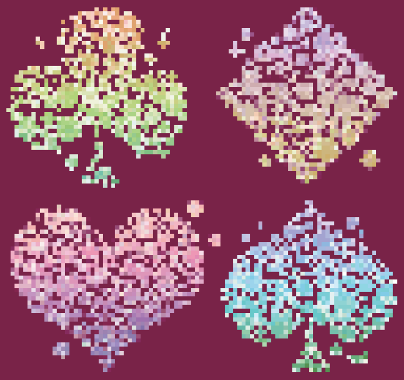
後向きのまま封筒を受け取り、「マジシャンはカードを扱い慣れているので、重さで中に何枚あるかわかってしまいます」と言いながら、密かにマイクロメーターで厚さを測り、枚数を認知します。

相手の方に向き直り、相手に封筒を渡し、開封されていないことを確認してもらいます。「この中に〇〇枚入っていますので、お 2 人のカードは〇〇枚目と〇〇枚目にあります。封筒から出して確かめてみましょう」と言います。相手に封筒を開封させ、上からトップからディールさせて、宣言した枚数目のカードを 2 枚並べて置かせ、客に名乗らせてから、それらを表向きにします。

ちなみに使うマイクロメーターは、ねじ式にぐるぐるまわしてはさむタイプではなく、バネ式で簡単にはさめるタイプのものを使います。

加藤英夫のホームページ

http://www.magicplaza.gn.to/

Card Magic Magazine 第 4 号

発　行　2012 年 8 月 5 日
著　者　加藤英夫
発行者　加藤英夫
hae16220@ams.odn.ne.jp